

Chogen & Shigeyoshi



東大寺大仏殿



重源上人坐像（東大寺・国宝）

あわ みんぶ たいふ き 阿波民部大夫忌

ちょうげん しげよし
重源と成良～奈良・徳島 祈りの架け橋～

日時：令和7年10月8日（水）午前10時～11時

会場：東大寺俊乗堂（奈良市雜司町、大仏殿東隣）

東大寺（奈良）と吉祥院（徳島）による合同法要



田口成良石像（徳島吉祥院）

八百年の昔、戦乱で焼けた東大寺や大仏殿を再興した僧を助けた阿波人がいた！

この法要は、南都焼討（なんとやきうち）で焼けた東大寺を再興した重源上人（ちょうげんじょうにん）と、その勧進活動を支えた阿波民部大夫・田口成良（たぐちしげよし）ら阿波の人々ほか、戦乱に巻き込まれた奈良市民らすべての関係者の慰靈と『奈良と徳島の絆』を祈って毎年営まれます。

東大寺（華厳宗大本山）と徳島県名西郡神山町の吉祥院（真言宗御室派）による合同法要で、会場は重源上人坐像が安置されている俊乗堂です。参加を希望される方は、奈良徳島県人会「阿波人形浄瑠璃同好会」宛てに電話FAX、メール、ハガキでお申込下さい（9月15日必着）。

【お申込・問合せ】〒630-8113 奈良県奈良市法蓮町 417-1-504 奈良徳島県人会「阿波人形浄瑠璃同好会」

本出 良一 Tel. 090-5051-0775 Fax. 0742-55-9621 E-mail : awa@netz.co.jp

奈良と徳島 永遠の絆を！

東大寺で、毎年秋に「合同法要」

あわみんぶたいふき ちょうげん しげよし
阿波民部大夫忌～重源と成良 奈良・徳島 祈りの架け橋～

日 時：令和7年10月8日（水）10時～11時

会 場：東大寺「俊乗堂（しゅんじょうどう）」

参 加：東大寺 橋村公英第224世別當ら僧侶5名

（奈良県奈良市雜司町406-1）

吉祥院 新居戒道住職ら僧侶5名

（徳島県名西郡神山町神領字北上門18-5）

奈良徳島県人会ならびに関係者

- 関連ページ
1. はじめに 奈良と徳島の架け橋になりたい！
 2. 阿波民部大夫・田口成良
 3. 創作物語「成良心の変遷～戦と信仰のはざまで～」
 4. 南都焼討、東大寺燃え落ちる
 5. 重源上人、困難を極めた東大寺再建
 6. 周防から瀬戸内海～淀川～木津川～奈良へ
 7. 開眼供養と大仏殿落慶法要
 8. 東大寺「俊乗堂」と徳島「吉祥院」
 9. 中国式「大仏様」と現在の大仏殿（参考文献）
 10. 資料編「南無阿弥陀仏作善集」より
 11. 資料編「東大寺寺中寺外惣絵図」より

作成／奈良徳島県人会 相談役 本出良一（阿波人形淨瑠璃同好会）

あ わ みんぶたいふき ちょうげん しげよし
阿波民部大夫忌～重源と成良 奈良・徳島 祈りの架け橋～

はじめに（奈良徳島県人会から）

この合同法要は、12世紀末に東大寺を再興した俊乗房・重源上人（ちょうげんじょうにん）と、その勧進活動を支えた阿波領主・田口成良（たぐちしげよし）や阿波の人々、中国人技術者、ほか南都焼討（なんとやきうち）で倒れたすべての関係者のための「合同法要」です。

また、奈良と徳島両県民の“永遠の絆”を願い、10月8日に重源上人が祀られている奈良東大寺の俊乗堂（しゅんじょうどう）で、毎年執り行われることが決まりました。

本年は法要の他、散華や平家琵琶の演奏も行われる予定です。

なお、この法要には奈良徳島県人会も『特別参加』させていただくことになりました。

本書は、ここに至る経緯などをまとめたものです。

奈良と徳島の架け橋に！

奈良徳島県人会は、2011年の東日本大震災と同年9月に発生した紀伊半島豪雨災害を機に「県人会って何をするところなのか？」を問い合わせ続けてきました。そして、私たちが取り組んだのは日本赤十字社奈良支部の協力を得て「紀伊半島豪雨災害の復興支援活動」としての募金活動でした。

会場は東大寺。毎年秋には200名を超える関西の阿波おどり連が奈良に結集、南大門から大仏殿に向かって躍り込み。集まった募金は5年間、被害の大きかった吉野郡十津川村に贈られました。

この活動は、8年前から「阿波人形浄瑠璃奈良公演」に引き継がれ、東大寺総合文化センターの「金鐘ホール」を中心に、徳島が誇る伝統文化の全国・海外への発信事業へつながりました。

私たちはこれらの活動を「奈良と徳島の架け橋事業」として13年間続けてきました。

そして、この活動をいつも支えて下さったのが「華厳宗大本山の東大寺」さんなのです。

東大寺、二度の戦禍で廃絶の危機

東大寺は1300年前の奈良時代に、聖武天皇の勅願によって天下太平・万民豊楽を祈願する国分寺として創建されました。

その後、自然災害や2度にわたる大きな戦禍（1180年の南都焼討、1567年の三好・松永の乱）により、廃絶の危機を迎えたのですが、そのたびに奇跡ともいえる復興を遂げました。

その最大の功労者の一人は、800年以上も昔に活躍した重源上人（ちょうげんじょうにん）で、この僧を支えたのが阿波民部大夫・田口成良（たぐちしげよし）と徳島の人々であったことは余り知られていません。



東大寺での第8回阿波人形浄瑠璃公演（2024.12.7）

あわみんぶだいふ たぐちしげよし 阿波民部大夫・田口成良

794年（延暦13年）都は平城から平安京に移り、桓武天皇は阿波領主に田口息継（たぐちおきつぐ）を任命した。息継は桓武—平城—嵯峨天皇に仕え、平安京造営にも深く携わった。

田口成良は、息継から約200年後の末裔で、阿波と讃岐を支配した四国最大豪族であった。

早い時期から平清盛（たいらのきよもり）に仕え、1173年（承安3年）には、清盛が力を入れてきた大輪田泊（おおわだのとまり＝現在の神戸港）の築港奉行を務めた。阿波水軍の中心人物であった成良は日宋貿易でも大活躍し、平家の経済基盤を支えた。

南都焼討で先陣をつとめる

治承・寿永の乱（1180年～1185年）が起こると、成良は軍兵を率いて、いち早く阿波から上洛する。

清盛は政治の実権を握る。その一方で平家の強引な手法への反発も広がり、特に寺社勢力や地方の武士たちは不満を募らせた。

南都（奈良）でも1180年（治承4年）12月28日、清盛の五男の平重衡（たいらしげひら）が4万余騎を二手に分けて奈良坂、般若寺に攻め入り奈良市街に火をかけた。



田口成良の石像（吉祥院提供）

田口成良の年表

- | | |
|-------------|--|
| 1173年（承安3年） | ・成良大輪田泊の築港奉行に任命される |
| 1180年（治承4年） | ・12月28日南都焼討、平家軍の先陣を務める
(東大寺、興福寺をはじめ奈良市中は火の海に包まれる) |
| 1181年（治承5年） | ・2月 平清盛が謎の高熱で死去
(成良はすぐさま故郷に戻り四国の武士団をまとめる)
・8月 重源上人が「東大寺勧進職」に任命される
・10月 大仏鑄造が開始される |
| 1183年（寿永2年） | ・7月 木曾義仲が京入。平家は西海へ都落ち |
| 1184年（元暦元年） | ・2月 一ノ谷の合戦で平家敗北。この後すぐに成良は屋島に内裏を建設。 |
| 1185年（元暦2年） | ・2月 屋島の戦いで平家敗北。息子の田口則良は源義經の捕虜となる
・3月 壇ノ浦の戦い。300艘の軍船をもって源氏に寝返り、平家消滅
・5月 田口成良・則良親子は鎌倉へ護送され処刑（平家物語）
・8月 大仏開眼供養 |
| 1195年（建久6年） | ・3月 大仏殿落慶法要 |
| 1199年（正治元年） | ・8月 東大寺南大門建立 |

※この年表から、田口成良が重源上人を支援したのは1181年8月～1185年2月の4年間だった。

物資や労働力、それに船舶提供の他、重源上人が若い頃の修業時代に阿波を訪ねたり、日宋貿易の奉行時代に中国へ渡る重源を助けたことなど、いくつかの接点が想像できる。

創作物語：田口成良「心の変遷～戦と信仰のはざまで～」

成良に関する資料はほとんど残されていない。南都焼討の後、四国に戻り武士団をとりまとめて東大寺復興に尽力する。源平最後の合戦「壇ノ浦」では源氏方に寝返り、平氏滅亡を決定づけた。その田口成良の心の変遷をのぞいてみると…

序章：焼け落ちた東大寺（治承4年・1180）

都を搖るがす戦乱の中、成良は南都攻めの先陣を任せられた。

火矢が放たれ炎が大仏殿を包む。その熱と轟音のなか、成良は静かに手を合わせた。

彼の目に映る炎の中には、敵ではなく、自らがかつて幼き日に訪れた聖地の姿が揺らいでいた。

第二章：時代の転換と葛藤（治承5年～寿永年間）

清盛はこの世を去り、戦の大義は揺らいだ。平家の支配は次第に陰りを見せ始める。

成良もまた、その豪胆さと知略ゆえに、周囲の変化に敏感だった。

源氏の力が東国から満ちてくる中、成良は己の立場を見つめ直していた。

「武士の誇りも、仏の声も、聞かぬふりはできぬのか…」

第三章：重源上人とふれあい（養和元年・1181頃）

翌年、阿波国に戻った成良のもとに重源の使者が訪れた。使者が語る言葉に、懺悔と未来への希望の光を見た。「過ちを知る者が、再び立てる者となるのです」。

そして…重源上人と手紙のやりとりも行った。胸を打たれた成良は、決意する。

「阿波から大仏鑄造のための銅や木材を提供する。家来や領民も派遣して船も提供する」と。

第四章：源氏への転向、そして最期（元暦2年・1185）

成良は、嫡子の教能（のりよし）が源義經に投降した事を知った。

そして3月、壇ノ浦の戦いの最中に平氏を裏切り、300艘の軍船を率いて源氏方に寝返った。

これが平家の敗北を決定づけた。

「もはや、焼けたのは寺だけではない。我が心もまた焼かれた。再び立ち上がるべし」

しかし同年5月、頼朝の命により鎌倉で処刑され、激動の生涯を閉じる。

最終章

田口成良は、南都焼討の先陣を切った平家の武将でありながら、亡くなるまで焼けた東大寺の再建支援を続けた。それは、戦乱の中でゆらぐ信仰と権力のはざまに立たされた、ひとりの武士の心の変遷にほかならない。「仏を焼き、仏に帰した者」。

重源上人は、東大寺復興後、成良を再建の功労者として、徳島の「阿弥陀堂」を「浄土堂」として東大寺に移築、そして10体の丈六仏を安置するが、うち9体を阿波から取り寄せたのであった。さらに、浄土堂のすぐそばに成良を供養するための「五輪石塔」まで建てたのであった。

この石塔は、最大支援者であった源頼朝の石塔と相対して並んでいた…（東大寺寺中寺外惣絵図）

なんとやきうち 南都焼討

1180年（治承4年）8月の富士川の合戦で平氏が敗れたことから、時代は一気に戦乱に突入する。

諸国での挙兵が相次いだ。平清盛は近江、伊賀、伊勢など畿内一円に兵を派遣した。寺社勢力の強かった南都（奈良）への追討も同時に行うことになった。大衆（だいしゅ）といわれる僧兵らは防戦のため奈良坂・般若寺を固めて城郭を築いたが、四万余騎の重衡軍に蹴破られてしまった。

火の手が上ると折からの強風にあおられて、火災は奈良中をなめ尽くしてしまった。北は般若寺から南は新薬師寺付近、東は東大寺・興福寺の東端から西は佐保辺りに及び、現在の奈良市主要部の大半にあたる地域を巻き込んだ。



東大寺燃え落ちる

東大寺では金堂（大仏殿）・中門・回廊・講堂・東塔・東南院・尊勝院・戒壇院・八幡宮など寺の中核となる主要建築物のほとんどを失う。

焼け残ったのは中心からやや離れた高台にある鐘楼・法華堂・二月堂や寺域西端の西大门・転害門および正倉院などごく一部であった。この戦について平家物語には3,500人が焼死したと書かれている。

清盛の逝去

年が明け1181年（治承5年）になると、清盛は直ちに東大寺や興福寺の荘園所領を没収して別当・僧綱らを更迭、これらの寺院の再建を認めない方針を示し、再び南都に兵を派遣してこれを実行させるとともに逃亡した僧兵らの掃討を行わせた。

ところがその後間もない正月14日に、親平氏派の高倉天皇が崩御、続いて閏2月4日には清盛自身も謎の高熱を発して死去してしまう。人々はこれを『南都焼討の仏罰』と噂した。

父清盛に代わって政権を継承した平宗盛は東大寺・興福寺への処分を全て撤回した。

しかし、武家はいまだ戦乱にあけくれ、朝廷そのものも権威なく、人々は飢餓や苦しみにのたうち回るのみであった。

重源上人、東大寺勧進職に

重源上人が東大寺にやってきたのは、焼け跡が残る1181年（治承5年）2月であった。

東大寺炎上を聞き、後白河法皇から東大寺再建の責任者として派遣された藤原行隆を訪ねた。

行隆は、重源上人に「東大寺の再建に力を」と懇願、東大寺の僧たちも重源上人こそと認めた。

後白河法皇から『東大寺勧進職』に任命され、再建が始まることになった。

ちょうげんしょにん 重源上人

重源は1121年（保安2年）生まれ。房号は俊乗房（しゅんじょうぼう）。父の紀季重（きのすえしげ）という武官の三男坊であった。12歳で真言宗の醍醐寺に出家、浄土宗の開祖・法然に浄土教を学ぶ。17歳で大峯、熊野、葛城、御岳、白山など各地で山岳修行をする。四国にも入り空海の足跡を訪ねた。また「入唐三度聖人」と自ら称したように中国（南宋）の仏教聖地を度々訪れている。

重源の記録に残る入宋は1167年（仁安2年、重源46歳）。この頃は日宋貿易が活発になった時期に当たる。翌年に栄西（臨濟宗宗祖）とともに帰国したことが記されている（栄西は重源の後を受けて「2代目東大寺勧進職」となった）。この栄西との出会いが、その後の重源の人生を大きく変えることになる。



重源上人座像（東大寺・国宝）

困難を極めた東大寺の再建

重源上人による東大寺の再建が始まった。この時には重源上人は齢（よわい）61歳。1181年（養和元年）には、後白河院との話し合いで10万人からの檀那（お布施）を目標に大仏殿などの修理が完成するまで勧進を続けることになった。

自らは一輪車に乗り、「南無阿弥陀仏」を唱えながら五畿七道を巡り、弟子60人を諸国につかわして戦争と飢餓に苦しむ人々を助けると同時に、阿弥陀の功德によって大仏と日本の国を再建しようとした。



重源上人、一輪車で全国を勧進（富岡鉄斎画）

木材と銅は周防から

財政的・技術的に多大な困難があった。重源を後押ししたのは、後白河法皇と新たに武家社会を統率した源頼朝であった。そこで交渉したのが周防国（山口県）である。周防国は以前に後白河法王の所領であったのと、以前から木材と銅の産地であることを知っていたからだ。

大仏の铸造に使う銅は、主に日本最古の銅山「長登銅山」（山口県美祢市）から取り寄せたという資料が残っている。『東大寺要録』が引用する縁起文によれば、大仏建立に用いられた銅の量は記録によって差異があるが約500トンで、長登銅山やその近隣の銅山でまかなわれたことが推察される。

地元では「奈良の大仏のふるさと」として、記念館も建てられている。

中国人技術者も説得

重源自らも土木建築や美術装飾を学んだ。勧進活動によって再興に必要な資金を集め、それを元手に技術者や職人が実際の再建事業に従事した。

また栄西の引き合わせで、博多に滞在していた中国人の鑄物師・陳和卿（ちんなかい）と7人の職人や石工・伊行末（いぎょうまつ）を説得した。彼らは技術者として東大寺の再建に携わることになった。

大仏殿再建の木材探し

大仏殿の再建は何よりも、その用材の確保が大前提になる。一番最初に目をつけたのは吉野山で、それが駄目になって、次は伊勢神宮の松山の檜を所望したが、こちらも提供してもらえなかった。

東大寺の用材は伊勢以上の大きさが必要で、創建当時の奈良時代であれば、奈良の周辺からいくらでも切り出すことができた。しかし鎌倉時代になるとそれも不可能になり、困った先に行き着いたのが周防の国だった。

1186年（文治2年）に東大寺再建のために、正式に周防国が東大寺に与えられ、重源上人はその国司になった。上人はその年の4月18日に周防国に下向して「松始め（そまはじめ）」の式を行っている（伊勢神宮などで神木を切る行事のこと）。

東大寺勧進職を引き受けてから、5年が経っていた。

周防から瀬戸内海～淀川～木津川

この周防から、奈良まで大仏殿造営用の大木を伐り出し、搬送するのは難事業だった。

徳地町滑（なめら）というところから木を切り出す。そして佐波川（さばがわ）に筏をながして、瀬戸内海から大坂の淀川、木津川を遡上して、木津から奈良坂を登って運んだ。

佐波川というのは水量がそれほど豊かではないので、重源はそこに118ものダムを造って、その横に3mほどの水路を作つて水かさを増やして、筏を流した。

また、数十丈の谷を埋め、岩を碎いて道を作る。谷から谷に橋を架け、山中の道づくりだけで30kmにもおよんだ。さらに、木津から東大寺までは牛馬や人力で奈良坂を越す人手も必要だった。

今でも「重源の里」として保存整備

南大門の仁王像を解体したときに奈良国立文化財研究所で年輪測定法を使って調べてもらったところ、吽形像に使われている用材がここの周防の檜であることが分った。

山口県では徳地の自然豊かな環境を利用して、この辺り一帯を「重源の里」公園として整備し、時空を超えた夢工房をテーマにそば打ちや紙しき、さらには木工作りなど、日常では経験することのできない様々な体験ゾーンとして解放している。今でも予約さえ入れれば当時の「石風呂」体験をすることができる。<https://we-love.yamaguchi.jp/leisure/chogennosato>



山口県山口市徳地深谷に整備された「重源の郷」



山口県美祢郡美東町長登の「長登銅山」

大仏開眼供養と大仏殿落慶法要

焼失して4年後の1185年（文治元年）には大仏の開眼供養が行われた。仕上げの鍍金に使われた金は奥州の藤原秀衡（ひでひら）らが寄付、その使者に歌人西行あたった。国を挙げての事業であった。

その10年後1195年（建久6年）には念願の大仏殿も再建し、後鳥羽天皇はじめ、最大の支援者であった源頼朝らの列席のもと『大仏殿落慶法要』が営まれた。消失から実に14年目のことである。

源頼朝の約束

いくら勧進を求めて、大仏殿の用材調達は生やさしいものではなかった。

大仏再興のメドがたった1185年（元暦2年）重源上人は、後白河法皇のすすめもあり、壇ノ浦の戦いで勝利した源頼朝を鎌倉に訪ねている。諸国の御家人や守護地頭の協力を求めるためにも源氏の新しい統領となった頼朝の支援がなんとしても必要であった。

この時、頼朝は「畿内と西国の勧進は任せるが、関東方面については頼朝がつとめる。10年以内には大仏殿が完成するように努力する」と重源上人を励ましたといわれる。

落慶法要の日

1195年（建久6年）3月12日、国中の人が待ちに待った日がやってきた。前日から後鳥羽天皇はじめ京の洛中の人々はこぞって南都に下向し、諸国からも無数の人々が集まった。

頼朝は数万騎を引き連れて2月に鎌倉を出発。東大寺の四面を取り囲み、寺門の内外を固めた。

これは頼朝の一世一代の大デモンストレーションでもあり、これ以降、頼朝は一度も京へ上ることはないかった。重源らの東大寺再建の活動は、東大寺という寺院のワクを超えて広く日本社会の秩序の復興を目指したものになっていた。

重源上人没す！

重源上人は、1206年（建永元年）、自身が建立した浄土堂（現在の俊乗堂）で86歳で没する。

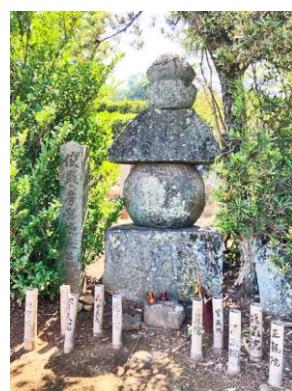
奈良市川上町の一角の伴墓（ともばか）と呼ばれる区画の五輪塔が重源上人の墓といわれ、今でも重源上人を慕って墓参が絶えない。春の修二会（お水取り）の過去帳では、重源上人は「造東大寺勧進大和尚位南無阿弥陀佛」と読み上げられ、功績が際立って大きかったことがわかる。



東大寺大仏殿（現在の大仏殿は江戸期に再建された）



重源上人の墓地石塔と墓石（奈良市川上町、三笠靈苑）



東大寺「俊乗堂」

この辺り一帯は「東大寺別所」と呼ばれ、もとは重源上人らの作業拠点であった。湯屋や食堂の他に阿波より移築された浄土堂があった。1567年（永禄10年）の兵火で類焼したが、元禄年間に公慶上人が重源上人の菩提を弔うためにお堂を再建、重源上人座像（国宝・運慶作）を移し本尊とした。

徳島から浄土堂と仏像を移転

東大寺を再建した重源の事績を集めた「南無阿弥陀仏作善（さぜん）集」と「東大寺造立供養記」には、阿波にあった阿弥陀堂が東大寺に浄土堂（後の俊乗堂）として移築されて、納められた10体の丈六仏のうち9体が阿波からもたらされ、その願主が「阿波民部・重義（成良）」と記されている。

残り1体は「六条殿尼御前」（資料編2「東大寺別所」を参照）とされ、壇ノ浦で孫の安徳天皇を抱いて入水した平清盛の妻の時子のこと。この時救助されてのちに出家して「建礼門院」となる娘の平徳子（安徳天皇の母）が納めたと思われる。（ちなみに南都焼討の平重衡は実兄）

大仏再建にあたり、時代の罪業を背負い全ての人の救済を願った重源上人の世界観が垣間見える。

江戸時代初期の作品である「東大寺寺中寺外惣絵図」にも、浄土堂跡近くに「重義」の五輪石塔が源頼朝の石塔に並んで描かれている。このことからも、重源上人の成良への深い想いが偲ばれる。

徳島・吉祥院

この合同法要の発起人となったのが、徳島県名西郡神山町にある吉祥院の新居戒道住職です。

東大寺を再建した重源上人と阿波民部大夫・田口成良のことを知り、令和6年秋、東大寺に合同慰靈法要を申し入れたのがきっかけとなり、東大寺俊乗堂で開催することが決定した。

同寺の縁起によると、800年（延暦19年）に弘法大師が同地を訪れて村人とともに干拓事業で鍬を振るい、住まいとして吉良山に庵を建て般若菩薩と般若心経を安置したのが始まりとされている。

以来、若い日の重源上人ははじめ聖や行者が修行する道場として繁栄したが、1577年（天正5年）に土佐の長宗我部氏の阿波侵略の兵火で炎上、廃絶したという。

2002年（平成14年）に新居住職が再建復興させた。



吉祥院で新居道戒住職と（2025.3.8）



重源上人座像が安置されている俊乗堂（提供／東大寺）

中国式建築様式「大仏様（だいぶつよう）」

重源上人が東大寺の再建にあたり導入したのは中国宋代の建築様式。日本の建築史に大きな影響を与える、東大寺大仏殿や南大門の再建にこの様式が用いられたことに由来する。重源上人が、中国（宋）の建築技術に触れ、導入には渡宋経験をもつ工人や技術者が存在した。現存する東大寺南大門がこの方式で建築されている。

特徴を次のように挙げることができる。

- ① 貫（ぬき）と呼ばれ、柱と柱の間に木材を貫通させて組む。
構造的に強度が増し、耐震性と安定性が向上する。
- ② 太くまっすぐな柱を使用し、強靭で開放的な空間を作り出す。
- ③ 和様建築（日本風）では隠されがちな構造材を、意図的に露出させて見せる。



東大寺南大門

現在の大仏殿は江戸期に再興

重源による復興から約四百年後の戦国時代。東大寺はまたも「三好・松永の戦い」により大仏殿を含む主要堂塔の大部分を失うことになる。永禄10年（1567年）、およそ半年間にわたり松永久秀、三好義継と三好三人衆、筒井順慶、池田勝正らが東大寺周辺で繰り広げた市街戦である。

その後、天下人になった豊臣秀吉は、焼損した東大寺大仏に代わる新たな木造大仏の造立を発願し、京都に「方広寺大仏」を造らせた（1595年）が、その後の地震や火災で焼失してしまう。

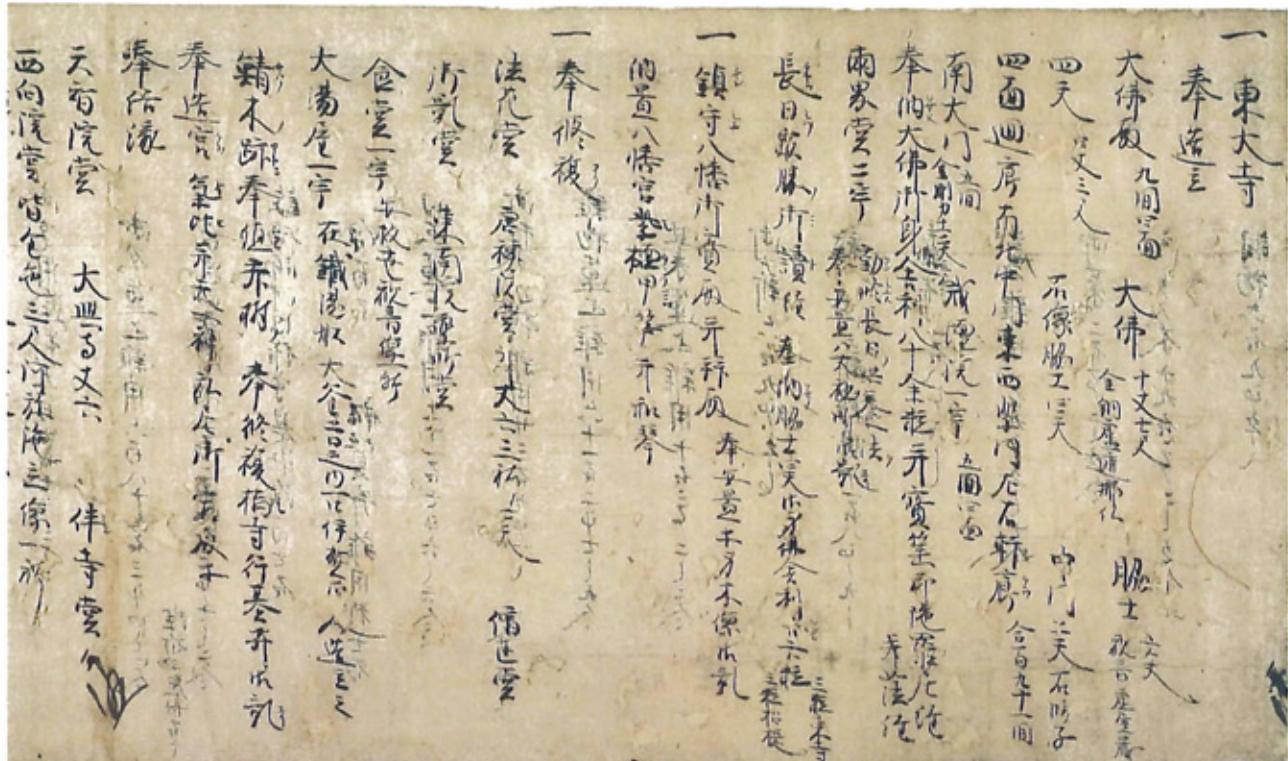
東大寺の大仏は江戸期に入って修復された。大仏殿は公慶上人（こうけいじょうにん 1648～1705）の尽力や、第5代将軍・徳川綱吉（つなよし）や母の桂昌院（けいしょういん）をはじめ、多くの人々による寄進が行われ1709年に完成した（現在の大仏殿）。

この間140年近く、東大寺は荒れ果てたままとなっていた。講堂、食堂、東西の七重塔などは、現在でも再建されず、その礎石は残ったままになっている。

【参考文献・資料】

「重源」	著者／川村一彦	2019年	Next Publishing Authors Press
「重源と栄西」	著者／久野修義	2011年	山川出版社
「誰も知らない東大寺」	著者／筒井寛秀	2006年	小学館
「大仏再建～中世民衆の熱狂」	著者／五味文彦	1995年	講談社
「大仏勧進ものがたり」	著者／平岡定海	1977年	厚徳社
「俊乗房重源の研究」	著者／小林 剛	1971年	有隣堂
「東大寺寺中寺外惣絵図」		17世紀	東大寺図書館
「南無阿弥陀仏作善集」	著者／重源上人	13世紀	東京大学

なむ あみだぶつ さぜんしゅう
「南無阿彌陀仏作善集」 東京大学史料編纂所所蔵（重源の生涯の事績が記される 1203 年頃）



一・東大寺 奉造立

大仏殿九間

(16.2m)

四面

大仏

十丈七尺

(30m)

脇士

六丈

金銅盧遮那仏

脇士

觀音虛空藏

四天四丈三尺

石像脇士四天

中門二天

石師

(獅)

子

四面廻廊・南北中門

東西樂門

左右軒廊

合百九十一間

南大門

五間

(9.0m)

金剛力士

二丈三尺

(6m)

戒壇院

一字五間四面

奉納大仏御身仏舍利八十余粒并宝筺印陀羅尼經

并如法經

兩界堂二宇

勤修長日供養法

安置八大祖師御影

長日取勝御読經

奉納脇士四

天御身仏舍利各六粒

三粒

東寺

招提

一鎮守八幡神

元并風

奉安

置不傳

風

乳

一奉修復

三粒

本

三粒

招提

一奉修復

三粒

本

三粒

招提

法光堂

三粒

本

三粒

招提

沙乳堂

三粒

本

三粒

招提

食堂

三粒

本

三粒

招提

大湯屋

三粒

本

三粒

招提

精木跡奉造赤羽

奉修復

行基

并成丸

奉造

三粒

本

三粒

招提

奉修復

三粒

本

三粒

招提

天香院堂

三粒

本

三粒

招提

西向院堂

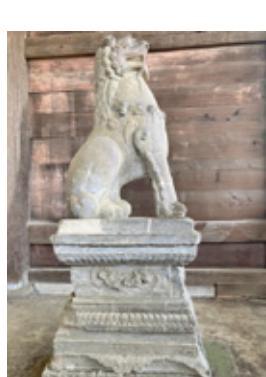
三粒

本

三粒

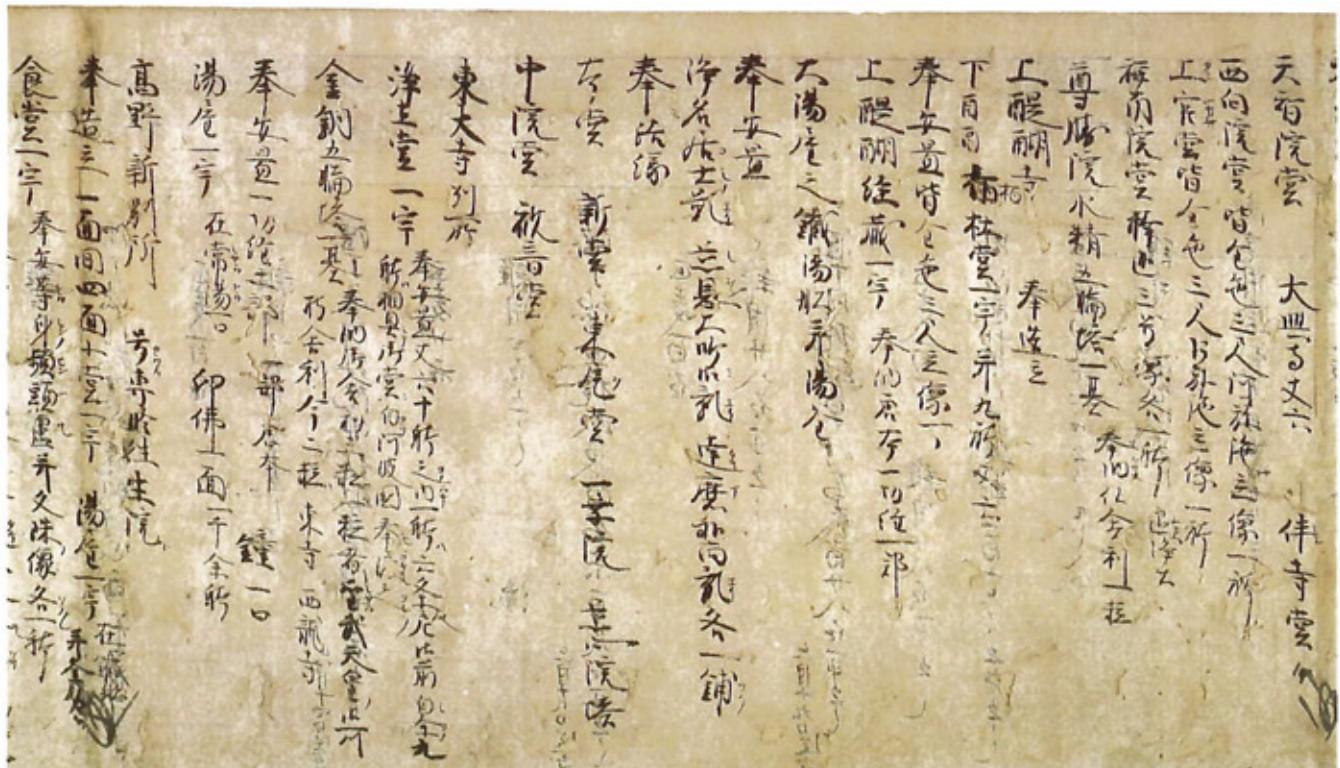
招提

重源上人が再建、現存する「東大寺南大門」



南大門の北面に安置されている石獅子（中国・宋時代）

なむあみだぶつさぜんしゅう
「南無阿弥陀仏作善集」その2 東京大学史料編纂所所蔵



とうだいじじちゅうじげそうえず
東大寺寺中寺外惣絵図 (東大寺図書館蔵)

